

私と大阪文学学校

津木林 洋

私は二十歳になった頃、名古屋を本拠とする同人誌『作家』の会員になった。戦後第一回目の芥川賞を受賞した小谷剛の主宰で、同人百名余りを誇る全国規模の同人誌だった。もちろん入る前はそんなことは少しも知らず、その当時名古屋の大学に在学中だった私が書店で同人誌を見つけたのだ。そこにいくつかの作品を発表して、同人になった。そのまま名古屋におれば、大阪文学学校とも無縁でいたことだろう。

たまたま父親が癌で亡くなり、大阪に戻ってきた私は、関西在住の同人たちと『作家』関西例会を立ち上げたのだが、その時大阪文学学校の存在を知った。ちょっと行ってみるかとは私は思った。すでに作品発表の場があるにも関わらずそんなことを思ったのは、不安だったからだ。

小説を読むのが好きで、自分でも書いてみたいと思って書き始めたのだが、大学は理系で文学の勉強をしたことはない。このまま無手勝流で書いていっていいものか、一度きちんと学んだ方がいいのではないか。そんな思いでいたところに、文学学校と名の付いた場所があれば、これは行かざるを得ないではないか。

一九七六年十月、私は大阪文学学校に入学した。開講式の時、初めて新谷町第一ビルに足を踏み入れたが、今と同様の陰気な感じで、これでは入学者も少ないだろうなと思ったことを覚えていいる。ところが会場は満杯で熱気にあふれており、そのことが私を喜ばせた。こんなにも何かを書こうとしている人々がいる、自分の同類がいる、そんな気持ちになった。

当時は二十代、三十代の若い人が多くを占めており、チューターも若かった。今とは違って前期、後期で担当チューターが替わるシステムで、前期が太田順三さんで三十代半ば、後期が奥野忠昭さんで四十そこそこ、そんな時代だった。カリキュラムも今とは違って作品の締切を強制されることはなく、書けた人が作品を出し、ないときはチューターの属している同人誌の作品を合評したりした。その他に外部から呼んできた作家による講義もあった。その中で唯一覚えていいるのは井上光晴の話したことで、小説を書きたいのなら嘘日記を毎日書きなさいというものだった。大学ノートを買ってきて、左のページには本当の日記、右のページにはその日記をネタにして嘘の日記を書け、というのだ。なるほど私は思った。

質疑応答で誰かが、先生はいつ頃から嘘日記を書いているんですかと聞いた。すると井上光晴は一言、俺は書いたことがないけどな。教室内があららという雰囲気になったのは言うまでもない。確かに嘘日記というのは面白いアイデアだが、私は今もって試したことはない。

本科に一年だけ通い、私は大阪文学学校を修了した。文学を学ぶというよりは実践の塾とか道場みたいなもので、それはそれで面白いのだが、すでに作品発表の場を持っている身としてはもういいかと思ったのだ。それにその後奥野クラスの修了生たちが創刊しようとしていた同人誌『せる』に誘われて、そこで書き出したことも大きかった。

大阪文学学校とのつながりも途切れてしまった。

そして一九九九年の暮れ頃だったろうか。奥野さんからチューターをやってみないかという誘いを受けた。私は即座に断った。小説の書き方は独学で、誰かに教わったこともないし、そんな人間が教える立場に立つことはできないというのが理由だった。有り体にいって、自分はその柄ではないと思っただのだ。しかし奥野さんは諦めない。あの手この手で説得にかかり、最後にこう言った。「新しいことをするのも面白いんじゃないか」

小説を書く人間は大体好奇心の強い者が多い。私は奥野さんの言葉にやってもいいかなと少し心を動かされた。本科一年しか通っていないので三年ほどチューターをやれば恩返しも済むかと。

二〇〇〇年四月から私は夜間の小説本科のチューターになった。その年の一月に修了生の玄月さんが芥川賞を受賞し、大阪文学学校を取り上げたドキュメンタリーがNHKで放送された効果もあって、一クラス二十三名の大所帯だった。

チューターとはどういうことをするのか、『作家』や『せる』での合評を手がかりに手探り状態でチューター業をこなしていった。それで分かったことは、いかに自分が小説について考えていなかっただかということだった。クラスの人たちの様々な作品を読んでいると、小説とは何だろうと考えざるを得なくなる。感覚で書いていたところを言語化しなければならず、遅ればせながらそれに役に立ついくつかの本を探して読んだりした。何のことはない、若い頃大阪文学学校に入って文学の勉強をしようとしたことをチューターになって実現しているのだ。

私が歴史小説に取り組んだのもクラスに出てきた歴史物に触発されたことが大きい。若い頃幕末の絵師たちに興味を引かれ、彼らを書きたかったが、自分にはハードルが高すぎて書けないと思っていた。しかしクラスの人たちの作品を読むと、案ずるより産むがやすしかと背中を押された。それで書いたのが『とつげん・いっけい——維新に先駆けた絵師』である。

三年で辞めるつもりが、いつのまにか二十年になってしまった。それはひとえに、チューターをすることで文学を学び、小説を書き続けるエネルギーをクラスの人たちからいただいたからに他ならない。

〈「リレーエッセイ⑨」の訂正と補足を119ページに掲載しています〉

早く起きてきて」

妻だった。生活に追われてすっかり忘れていたのだが、恋愛を楽しんでいた頃の妻はお茶目で愉快な女性だったのだ。私は妻と娘に内緒で秘密任務を遂行するスパイになった夫というものを、まんまと妄想させられてしまっていた。

「はい、女王陛下様。すぐに参ります」

返事をしてから電話を切った私は、妻の壮大なのに単純な悪戯に、朝から笑いが止まらなかった。

(以上 日野範之 選)

〔訂正と補足〕前658号「リレーエッセイ」欄

中塚鞠子さん「私と大阪文学学校」は第1次文校の最盛期、その熱気を伝えて、優れている。資料が不如意だったようで、私は当時、事務局にいたので左記を補足。文学学校初期について、既に若手研究者の研究対象になっているようなので、ヨリ正確に伝えたい。

○「片山昭彦」↓「片山昭弘」(画家)

○中塚(青井)さんは本科二十四期生(一九六五年)

○当時、本科(一年)は週二日、研究科(一年)は週一日。講義が中心の組立てで、組会(実作合評会)と。

○教室は間借りで、講義は森ノ宮の教員会館、組会は市立労働会館の各小部屋で(一九七三年六月初めまで)。

(大阪文学学校三十年略年表から) (日野範之)